

古事記を読む会 2014年11月9日 NO.6

10月5日（日）午前10時から第6回古事記を読む会が開かれた。今回は、新たに中巻に入ることになる。中巻を第一代神武天皇から第9代開化天皇まで音読した。神武天皇の東征からい五瀬命の戦死、熊野の高倉下、八咫鳥の先導と有名な場面が続いた。で放映された（BS歴史館）の映像の視聴があり、活発な意見交換を行った。

第5回は、「日子穂々手見命と鵜葺草葺不合命」ということで、海神の国訪問、鵜葺草葺不合命の誕生、鵜葺草葺不合命の系譜と進んだ。これで、上巻が終了する。多くの疑問を持ちながら何とか読んだという感じである。上つ巻の最後の部分を、小学館『古事記』の下欄和訳を紹介しておく。

この天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命が叔母の玉依毘売命を娶って生んだ御子の名は、五瀬命。次に稲氷命。次に御毛沼命。次に、若御毛沼命、またの名は、豊御毛沼命、またの名は、神倭伊波礼毘古命（四柱）そして、御毛沼命は、波頭を伝って、常世国へお渡りになり、稲氷命は、亡き母の国である、海原にお入りになった。古事紀（ふることふみ）上つ巻

【心に残ったこと等・・・会員のメモから】

- ・『古事記』上巻についてNHKビデオは、大変参考になった。『記』と『紀』の違いに気を使って読むことが必要だと思います。たとえば、「大日下」と「大草香」との違いなど歴史認識の問題です。
- ・意見交換の中で、登場人物が見るな（覗くな）と言われても必ず見てしまうということに関して、様々な意見が出たが、確かにそのようなやりとりを行う場面が多くあると気づくことが出来ました。私としては、こうしたやりとり（見るなと言われると見てしまう）というのは、人間の心理を良く表しているなと思います。古事記の中にある文学性（表現力）の高さを感じました。
- ・見てはいけないと言われて見えてしまい、そのたびに人間に近づいていくというのが面白い。自然観・生命力の源、不完全な人の話といった内容であるのがなるほどと思った。
- ・天皇（神武）の母と祖母をワニにしなければならない理由が分からない。
- ・持統期に関心をもっています。古事記の成立を持統期にあてはめて考えてみると言うことがとても斬新に思えました。中大兄皇子と大海人皇子名前もいろいろな憶測ができる事など勉強になりました。
- ・末っ子大国主の成長物語は、国づくりに貢献した大国主の成長を表し、国難に出会いながら立派に成長する。苦難の乗り越え方がその頃の様子を表す。
- ・持統天皇をアマテラスに比す読み方がビデオで紹介された。当時日本は激動の時代にあり、自国の独自性を示さないと飲み込まれる危機にあったと言う。ビデオは大変参考になる視点が示されていた。